

童話「つるのとぶ日」考

——作者の立場から——

大野 允 子

「つるのとぶ日」は、三年前、三十八年の夏、T書房から出版された短編童話集である。商業出版社のデスクには、持ち込み原稿が山積みされるといわれる中で、素人の作品が一冊になり得たのは好運だった。

その間の事情を、「つるのとぶ日によせて」と題して、児童文学評論家、菅忠道氏は次のように述べている。

「わたしはヒロシマ市で『子どもの家』童話研究会の同人のかたがたと、児童文学や現代っ子の問題をめぐって、いろいろ語りあう機会をもちました……『ヒロシマの原爆体験を、なんとかして民族のあとつぎである子どもたちに語りつたえたい。そのために、童話という表現の技術を身につけたい』というようなことばをきいて、わたしは身のひきしまる思いでした。ところが、その一方、原爆問題に取材した童話を書きつけてきた人たちから『ちかごろ、いきづまりを感じて、もっと別なものが書きたくなっている』と、うっ

たえられた。そのことばのひびきも、わたしには印象のふかいものでした。それで、わたしは一つの提案をしました。『子どもの家』同人の原爆童話集といったものを、中間的な決算としてでも、このさい、まとめておくべきではないのかと……峠三吉の『原爆詩集』や、大田洋子の『屍の街』、原民喜の『夏の花』、あるいは長田新編の作文集『原爆の子』をはじめ、ドキュメンタリーはいろいろ出ているのに、どうして原爆童話集を出せなかったのか、それを日本の児童文学の非力とも反省しながら、わたしは熱っばい思いで提言したのでした……同人からは多くの作品が寄せられましたが、わたしの責任で四人の十七編にしぼりあげて、この一さつにまとめることになったわけです……作品は、表現や描写という点では、まだ至らないところが少なくはありませんが、さすがに土地の人、事情を知っている人でなければ書けないような題材と問題意識の厚みで、はげしく迫ってきます。はじめには原爆の日のことを中心にした作品、つぎに原爆後遺症をめぐる作品、おしまいは原爆被災地に不死鳥のように立ちあがる人々の姿を描いた作品を、それぞれあつめ

てみました」

書名になった「つるのとぶ日」は集中の一編、私の書いた作品である。右の分類によると「不死鳥のように立ちあがる人々の姿を描いた」ものになるが、不死鳥という言葉は立派すぎておもはゆい。広島に実在する子どものグループを念頭にして書いたもので、マスコミ界では平和運動をする子どもたちとして扱われているが、多くの問題をかかえた会である。地元にいるだけに、裏面のあれこれも私は見てしまう。それが作品の基盤になることも、また多いわけである。

私たちの童話研究会は、子どものための文学創作を目的としたもので、同人は十人内外、いつも女性が多い。この種の集まり特有の消長をくり返しながらも、早十年、最初からの会員は私をいれて現在二人。童話でも書いてみようか、と思いつくのは、むかし作文が好きだった子どもに手もかからなくなったから、という母親や、職業がら小学校の教師に多い。しかし、一年も続く人は少ない。

「どうして童話を書く気になったのか」「同じ苦労するなら大人の文学をやったほうがましではないか」などいわれながら、ともあれ十年余、児童文学の創作を続けてきた私には、暇ができたから童話でも、という母親や、子どもをよく知っているから童話ぐらい書けるだろう、という教師には、苦々しさを感ずるし、大人の文学のほうがましだと考える連中には、反撥も感じる。

だが、今の日本には「童話ぐらい」という考えを支える何かがあることも確かである。子どもを含めて、子どもに関する多くのものが、児童文学もまた、軽んじられているのは事実である。「つるの

とぶ日」は題材の特異さを買われて大臣賞などをもち、必読リストにも組み入れられた。うまくマスコミに乗った書物だったが、それでも、三百六十円の本は八千冊しか売れなかったのである。大人のものが万の単位で発刊されるのに比して、寂しい数字である。子どもの本は、何十万と売れる少年週刊誌は別だが、創作童話の多くはもうけにならないので、大手の出版社は敬遠する。

本屋だけではない。大人のものを書くための手ならしだとか、今は子どものものを書いているがいずれは大人の文学を、という同人も何人もいた。

自分なりにこの道を歩いてきた私には、大人のものより児童文学のほうがより重要な意義をもつし、制約があるから創作はより困難だと思える。児童文学とは何か、を一言でいうのはむづかしい。ただ私は、子どもたちにぜひ知っておいてほしいこと、考えなければならぬこと、子どもにとって大事なことを、美しい日本語で子どもたちにわかるようにできるだけだけおもしろく描くように、努めてきたつもりである。子ども、を連発したけれど、今、私のまわりにはまったく子どもっけはない。私は自分の中の「子ども」と対話をする。自分の中の子どもは、今の私につながるかつての自分自身である。私の中の子どもは、今も戦争の傷あとを持っている。

二十一年前のあの日に境に、私の生活は一変した。学校も先生も失った。目には見えないさまざまのものを、私は失った。

あの頃、私は被服廠で野戦用のカヤを縫っていた。工場は閉鎖されて学徒動員隊は解散した。百田札一枚とカヤの布一枚分を私はもらった。

必勝・現人神天皇・大東西共榮團の建設・袖風、等々の言葉も

心にしみついている。すべてが虚言だったのか。とまどいと大人たちへの不信とが私を傷つけた。聖戦が侵略戦と呼ばれるようになったが、大人たちは一度も、そのわけを教えてはくれなかった。どの先生も新しくつくり直された教科書で、デモクラシーを講義した。今でも私は、あの戦争がどうして起こったのか、どうしてあのように戦争のためにひたむきになり、そして裏切られた思いを今も捨てることができないでいるのか、を考える。これが、私に児童文学の創作をさせる原動力かもしれない。

私は、私の中の子どもと今も対話を続ける。私の中の子どもと現代っ子は、本質的に変りはない。私の不幸が彼らにわからぬわけがないと思う。私の悩みや迷いのあとづけが、彼女らのプラスになつてくれるとも思う。「原爆の体験を民族のあとつぎである子どもたちに伝えたい」というと大げさだが、貴重な広島人の体験をむだにしたくなかったのである。文学が人間を語るものなら、私にとって原爆と自分の問題をぬきにしては、何も語れないわけである。

「あのことを、子どもたちにも、やっぱり知っておいてもらいたかったのです。あのことをとおして、わたしたちの願いを、きいてほしかったのです。あの日、わたしの学校は焼きました。先生も友人も、死にました……だから、わたしたちは、どうしても、わすれることができないのです。」

ほんとうに、あったこと。

わすれては、ならないこと。

二どとあっては、ならないこと。

これを書くのが、ヒロシマに在るものの、つとめのように、おもえたのです」

あとがきに、私はこう書いたけれど会の中ですぐに衆議一決したわけではない。

児童文学にあんな悲惨なものを扱うのはどうか、あまりに暗すぎる、子どもには明るいものを与えるべきではないか。児童文学には大人のものとは違って、制約がある、あの原爆はどうしてそのわくの中では扱えないのではないか。十何年もたって、今さら原爆でもなかるう、前むきのテーマに取り組むべきではないか、等の反論があった。それでも、私は書き始めた。

正面から原爆と対した時、私はおかしなことに気づいた。広島には原爆不感症患者が実に多い。何でもわかつていっているような気で、何も知ってはいない連中である。馴れの恐しさでもいうのか。作品以前の時点で、多くのことを学び得た。

三年ほどの間に、私は十ほどの作品を書いた。その中の七編が童話集『つるのとぶ日』に入っている。私の疑問は遂に解決されなかった。あまりにも大きな問題で、正直いって、歯がたたなかったのである。

『週刊朝日』で、坂西志保氏はこんなことをいっている。

「ガラスびんが原爆の光を透さなかったため、生き残った一粒のもみの話、原爆に影を奪われた男の話、母の幻影を追って車にひかれて死ぬ子の話など、原爆を体験し、その地に住んだ人でなければ書けないもので、恐ろしい力で読者にせまってくる。しかし童話としては題材があまりにもなまなましく悲惨である……自分たちの恐怖と悲しみと憤りを浄化する時はじめて、すぐれた原爆童話集が生まれるのではなからうか」

悲惨でもなまなましくても仕方ない。それを間接体験すること

で、戦争の何物かを少しでも考えてもらいたかったのだから。悲しみや憤りの浄化はむづかしいことだが、これは、児童文学界の論客、古田足日代の『文学』での指摘と共通のものを持っていて、大いに作者としては反省させられた。

「作者の実感だけにたよって、自然主義的である」「被書者意識」で描かれている。「つるのとぶ日」などが内容的に提起している現在の状況」が描かれていないが、今後の問題はそこにある。

などと、思想や方法について古田氏はその難を述べている。そして、戦争に歯がたたなかった私の弱さを、次のように手きびしく指摘している。

「原爆は告発される。だが、戦争はどうなったのか。少女の死をもたらしただけではない。戦争もそうだ。戦争と、戦争体制のなかで原爆は告発されるべきである」

これら批評の上になつて、私は長編『海にたつじ』を書いた。短編とは異つた手法で、戦争と原爆と一人の少女の死を描いた。昨年一冊になつてK社から出版されたが、戦争の生体が描きたりない、思想が不足している、甘い、とさんさんにやられた。あるいは一生、私は戦争の生体をつかみ得ないかもしれない。今も戦争の続いている中で、私は時おり絶望に近いものを感じる。「つるのとぶ日」に象徴されるほんとの平和なんて、しょせん夢にすぎないのではないか……そんなたじろぎの中で、私は子どもたちの声を思い出す。

「わたしは、せんそうもしらないし、げんばくのこと、しりません……どうして、せんそうをしたのかも、わかりません。でも、この本をよんで、かなしくなりました……はじめはむずかしかった

けど、よみかけたら、いっしょうけんめいよんだので、げんばくのかなしいおそろしいことがすこしわかりました。こんどは、おともだちにこの本をかしてあげます」 (小二、女)

「あなたがたは、ほくに、人生にとって大事なことを一つ教えてくれました。それは人間の心の中に生きる人類の平和ということですよ……平和を願う心です……人間の平和を願う心が大きくなれば、あるいはヒロシマのために死んだ人の死もむだにはならないと思います」 (中男)

「『つるのとぶ日』を読みました。どれも感動するものばかりですが、特に『雪のふる日のこと』には涙がポロポロ出ました。私は高校生ですが……これを読んだ人ならば誰でも決して二度と戦争を起してはならないと思うでしょう」 (高男)

(二)

「つるのとぶ日」は、小学校、四年用の『道徳の指導資料』(一九六四年版)に、読み物資料の一つとして転載されている。

「貴殿の著作物がきわめて有益と考えられますので、引用させていただきます」という依頼状が文部省からやってきたのは、児童集が出版された翌年だった。

やがて、無償配布にふさわしい粗末なザラ紙ずりの資料集が、私のところへも送られてきた。「つるのとぶ日」は「崇高なものを尊び清らかな心をもとう」というねらいのための読み物資料になっていた。

私はあわてた。「崇高なものを尊び」などというもんくが、あまりにも突飛だったからだ。その時の驚きを、私は今も思い出すこと

ができる。そのねらいと作品「つるのとぶ日」が、どこで結びつくのか私にはとんと見当がつかなかったのである。

頁をくるにつれて、驚きは決定的になった。左は、文部省案「展開の大要」の一部である。

(1) 自分の家庭における神仏崇拜について考え話し合う。

○神仏に手を合わせるの、どういふときか。

○彼岸にお墓に行ってお参りをするときどんな気持ちがあるか。

(2) ふだんの生活において清らかな気持ちになったことについて話し合う。

○自然の美しさに心打たれたとき。

○人のりっぱな行ないを、すなおにみつめたとき。

(3) 読み物「つるのとぶ日」を読んで聞かせ話し合う。

○さだこのねがいはなんであろうか。

○焼かれても灰にならないものはなにか。

○そのような清い心は、自分たちひとりひとりの心の中にもあることについて。

もちろんこれは一つの参考案だが、神仏崇拜という導入が原爆被爆のために死んだ一人の少女の語に、結びつけられていくわけである。

原作は子どもが読んでも十分もかからぬほどの短かいものだが、資料としては前、中、後略で、かなりの部分が略されている。現在と過去とが交錯する構成はやや複雑だが、そのからみ合いに作者のねらいはあったのである。主人公は現代の中学生。原爆症で死亡する過去の少女の話、彼女の残された学友たちの話が、エピソードの

ような形になって一編が成り立っている。資料はその挿入の部分を、悲しいが美しい話として利用している。

さだこの話と原爆の子の像の話は、有名な実話である。作者は、これをエピソードとしてうまく使い、焦点は主人公のかずえにあてたつもりである。かずえは「つるの会」の会員で、日照日には原爆の子の像のある公園を掃除することになっていた。被爆者救済の街頭募金や原爆病院の慰問も、会の仕事である。そんなことをすることによって、かずえは自分が社会とつながっていると思う。間接的だが、子どもにできる一種の平和運動のつもりだった。しかし、「つるの会」へもかずえへも、風あたりは強い。そんなことをして何になる、子どもは勉強が第一だ、と大人たちはいう。かずえ自身、そんな冷たさの中で自問し、迷うようになっていった。受験勉強でもしたほうが、やっぱりとくではないか、と思う。さだこをかたどった原爆の子の像には、紙で折った鶴がいっぱい供えられている。こんな鶴を折ったって、ほんとは何にもならないではないか。自分の願いととは逆に、大人の社会はどんどん動いていく。かずえはやっぱり「つるの会」なんか止めてしまおう、と思う。その時、朝日の中のさだこの像が、語りかける。……鶴を折る心が尊いのだ、そんな心で世界が包まれた日こそ、紙の折り鶴の飛ぶ日なんだ、あせってはいけない。かずえは、そんな日が来るわけがない、と反撥しながら、涙ぐむ。

私はこの中に、平和運動の一つの姿をのぞかせたつもりである。解決はない。かずえの迷いは私自身の迷いでもあった。かずえを通して、現代人のモラルのようなものを描きかけた。

しかし、かずえは抹殺されて、さだこの美談だけが残された。そ

これはもはや、私の作品「つるのとぶ日」ではない。作品は作者の手を離れて行ってしまふ、といわれるが、私にはやっぱり自作の行方が気にかかる。表現のまずさや形象化の未熟さのために、作者の意図が曲つてとられたのならその責めは自分にある。しかし、読者との間にある者、媒介者の手によって作品が変質させられるのは、許せない。一つのねらいのために、それにふさわしい資料として提出するために、余分なものをカットするのは当作者にとっては当り前のことだったかもしれない。一つの意図にそつて選り出される教材とは、元来、こんな姿のものかもしれない。

作者にとつては、何ともやりきれないことである。

資料集をもとにして作られた副読本が、手もとに二冊ある。

A会 『どうとく 明るい心』

G社 『みんなのどうとく』

A会の本文は、ほとんど資料集通りで「さだこさんのような清らかな気持ちについて、話し合ってみましょう」と設問がある。鶴を折りながら生きることがを願ひ続けたげさに目をよせて、清らかな心の美しさを感じ考えさせようというのは、文部省案そのままである。

G社の本文は、すっかりリライトされ、原作者名、作者名のかわりに、リライター者の名前が列挙され、巻末には「美しい物語やできごとに興味をもち、やさしい清らかな感情をもつようにする」という指導目標と、指導要領「敬けん」との関係まで明記してある。その上、詳細な教師用指導書も作られていて、素人目にも使い易そうである。

指導書、展開の例をみると、さすがにこつちのほうが文部省案よ

り、まともである。「神仏崇拜」などという高みから入ることを避けている。

導入は「今までにこうしたい」「こうあってほしい」と感じたとや「ねがいごと」をした経験を話し合おう、となっている。「现实生活をよりよくしたい」という希望、幸福な生活への願望はだれもが経験していることである。その気持ちだが、人類愛に通ずるよう広がっていくようにすることがねらい」だと、注意がそえてある。親切だが、「つるのとぶ日」が出發の時点で失つたものは、どんなに言葉をつくしてももどつてはこない。資料集を下敷きにしたのだから、当然のことである。設問に「あなたのまわりには、さだこさんのように気のどくな人は、いませんか」とある。作者としては、気のどくなさだこさんの話にしたいのである。同情されては困るのである。さだこの死の奥にあるものを、さぐり出してほしいのである。

みそっかすの男の子の話や、細川ガラシャ夫人の話が、参考としてあげてあった。「似た話をさがして読もう」という設問につながるのだから、私にはどうにもうなずけなかった。いつもよけ者にされていた男の子が、みぞに落ちて死んだ。男の子の顔には「ぼくだって人間だぞ、いつもみそっかすじゃないぞ」という叫びが浮かんでいた、というのである。自害して果てた戦国武将の奥方の話、などと、どこに共通のものがあるのだろうか。やっぱり私にはわからない。

「つるのとぶ日」の作品としての価値は、それらの話とはまったく異つたところに、あつたはずである。むさんな変わりざまを見て、作者と読者をつなぐもの、媒介者の力の大きさを、私はまざまざと

感じさせられた。

(三)

つい先日、S書房の高校生新書『戦争とはなんだ』を、私は興味深く読んだ。

編者の安田武氏はある時、高校生たちの座談会の司会をやった。

彼らがベトナムを論じる激しさに若者らしきがあふれていて、珍しく心の洗われる思いがした。会の終りに安田氏は、日本の戦争を描いたいくつかの書名をあげ、読んだ者の禁手を求めた。ところが一人も応える者がなかったというのである。『きけわだつるの声』一冊も、『原爆の子』一冊すら、彼らが読んでいないことに、安田氏は暗たんたる思いになった。あれほどベトナムを論じる若者たちがである。

「二十年まえの日本の若者たちの言語道断の苦しみが、二十年後のおなじ日本の若者たちに、その隻語半句すら伝わっていない」「教育などというものは、何のためにあるのか」と安田氏は自問する。ナチスの虐殺にあったユダヤ人は「忘れない」という言葉を糧にして生きている。「記憶することは道徳である」とユダヤ人はいうそうである。日本人はこれでもいいのか、と安田氏は問題を投げかける。

心にしみる言葉だった。高校生の彼らは、かつて雑誌の戦記物を興味深く読んだはずである。男の子の多くは、戦記物のファンである。東京・深川小学校の石上正夫氏が、同校四年を対象に行った雑誌利用の実態調査（一九六四年十月調）から、二、三の数字を借りてみよう。

○ 雑誌をきまって買う者

五三%

○ 自分で買って読む者

六七%

○ 雑誌の中で戦記物を関心をもって読んでいる者

二九%

○ 九月一ヶ月に読んだ一人平均冊数

雑誌 五・七冊
一般図書 三・九冊

石上氏は文学教育連盟の会員で、図書館利用にも熱心な教師である。かなり密度の高い読書指導をしている同校において、右のような結果である。雑誌が子どもたちの間にしめる力は実に大きい。子どもたちはこういふ。

「戦争はいやなことだ……戦争のまねをするのはすきだ……その遊びをくわしく知るために……読む」

「戦争というものが大好きだ……戦争が突さい始まるのはすきではない……戦争の内容はだいたい雑誌などで知っている」

子どもの好きな勇ましい話が、六四年、六月号『少年キング』には八編ものせられている。

広島の実業街にあるK堂へ行って、私は子どもむきの週刊誌の売れ行きを聞いてみた。トップは『少年サンデー』の四十冊。『少年マガジン』『マーガレット』『少女フレンド』が三十冊。『少年キング』二十冊がそれについている。週平均、この程度が売れるれそうである。広島でも、この種の雑誌の読者は多いわけである。

雑誌の戦記物から発展してS社の『太平洋戦争史』などを読むようになる子どもはいふ。しかし、戦争史から戦争文学への発展はみられない。この間隙に読書指導の必要性があると、石上氏はいふ。

「高校生が『原爆の子』一冊すら読んでいなかったという事実は、こ

の指摘を裏書きするものであろう。

広島県の中学生三百七十名(三校)のアンケートをもとにつくられた小冊子『中学生の原爆と戦争の意識』の中に、こんな言葉がのせられていた。

「げんばく反対というはなしは聞きあきました。それより、ほんとうのげんばくにあわれた人たちの話が聞きたい。どこにいろのだらう」

かけ声やスローガンではない、事実そのものを彼らは知りたがっているのである。

『戦争児童文学を子どもにどのように出あわせるか』という石上氏の論文に、私は新しい読書指導のあり方と、文学教育の好例を見た思いである。指導案の一部を転記してみよう。

(一) 題材名 戦争の本

(二) 目標 戦争についての正しい批判力を育てるために、戦争児童文学や戦記物を幅広く読む態度を育てる。

(三) 指導計画 (五年)

- 1、少年少女雑誌についての話し合い 一時間 読書
 - 2、生命の尊さ 一時間 道徳
 - 3、戦争の本の読書計画 一時間 読書
 - 4、読書会 ハグループ 課外
 - 5、「つるのとぶ日」読み聞かせ話し合い 一時間 読書
 - 6、戦争の本の紹介 一時間 読書
 - 7、戦争の本の読書 読書ノートの記録 個別指導
- グループは四一六名編成。
戦争の本としては左の八冊を指定する。

戦火燃える太平洋 つるのとぶ日

ぼくらの村は戦場だった 火の陣

ビルマの堅壁 ぼくらの出航

太平洋海戦記 星の牧場

グループごとに一冊ずつを読んだわけだが、教室での読みとりは「つるのとぶ日」だけ。短編で扱い易いからであらう。その指導事項もなかなか要を得たものである。

1、戦争文学と戦記物と二種類の図書があることに気づかせる。さらに歴史へと戦争を知るための道すじをおぼろげながらも理解させる。

2、さだこの願いをしっかりとつかみとる。鶴のとぶ平和な日が訪れることへの祈りと願いなど。

3、雑誌やテレビの戦争ものの特徴を理解させる。

4、原爆戦争以外の戦争も多くの人々の無残な犠牲の上に遂行されていることに目をむけさせる。

5、戦争の本とつるの姿を知るためには、いろいろな本を読んでみなければわからないことを知り、読書欲をもり立てる。

一時間の内容としては実にはたっぶりしている。もちろんこれは、前後に四時間の時間配当をしてはじめて可能なことである。

この間に高められた子どもたちの戦争文学への関心を「個人の読書生活の中に生かし、読書ノートを媒体として、戦争について語り合い、戦争の実態を子どもなりに理解させて行きたい」「戦争の真実の姿を知ることが、戦争を批判し戦争に反対し、平和な生活を歴史の大きな流れの中にかちとって行くエネルギーの源泉になることを確信する」と、石上氏はいう。同感である。

深川校では石上氏を中心に、数少ない戦争児童文学が図書館の書物の中に埋没しないように、独自の目録を作り主として高学年を対象に活用しているそうである。全部で三十七冊。どれにも、人間の歴史がつづられ、人間の切なる願いがこめられているはずだ。戦争と子どもたちの断絶を埋めるのに、こうした書物の果たす力が大きいことを、私は確信する。

作者と読者、作品と子どもをつなぐのは、心ある大人たちである。「つるのとぶ日」は石上氏によって、東京の小学生たちに手渡された。作品の不足を補ってあまりある、行き届いた手渡し方である。作者冥利につきるとは、こんなことをいうのかもしれない。決して「つるのとぶ日」は文学として秀れたものではない。ただ、この種のものがあまりにも少ないのである。そのせつかくの原爆童話を、戦争と切り離して扱うのは愚である。

「つるのとぶ日」をめぐる二つの方法、きわめて対照的な二つの例は、私に、現代の教育のもついくつかの問題を、改めて考えさせた。大きな問題である。

自作「つるのとぶ日」考は、作者と作品、作品と読者の関係を語る一つの体験談である。そして、問題提起で終るいわば一つの序論である。

——完——

(児童文学者)